

# オーストラリア国立図書館での レファレンス・ワーク

中野捷三

- |   |  |
|---|--|
| <p>I はじめに</p> <p>II オーストラリア国立図書館：<br/>オリエンタリア</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 職員</li> <li>2. 収集方針</li> <li>3. 蔵書の構成と特徴</li> <li>4. カードと公開目録</li> <li>5. オリエンタリアの現状</li> </ol> <p>III オーストラリア全体における<br/>日本語コレクション</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 蔵書の統計</li> <li>2. 大学図書館の日本語資料</li> <li>3. 日本研究者たち</li> </ol> | <p>IV オリエンタリアにおける<br/>レファレンス・ワーク</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. レファレンス依頼者</li> <li>2. レファレンスの経路</li> <li>3. レファレンスの種類と内容</li> </ol> <p>V レファレンス雑感</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 司書の問題</li> <li>2. 科学技術分野の逐次刊行物</li> <li>3. 資料の限界</li> <li>4. 言語の壁</li> <li>5. 外からみた当館の書誌類</li> <li>6. おわりに</li> </ol> |
|---|--|

## I はじめに

国立国会図書館は、オーストラリア国立図書館からの要請に応じて、昭和40年3月から司書を各々2～3年の期間で派遣し続け、現在7人目の司書が同館で日本語資料の選書・整理・レファレンス等の業務を行っている。前任司書は帰国後、「国立国会図書館月報」「びぶろす」等に寄稿して同館の概要、同国図書館事情等を広く知らしめ、これらにオーストラリア国立大学図書館へ派遣された司書の報告を加えれば、その数すでに十指に余る<sup>(1)</sup>。いずれも、同

国図書館事情を知るうえで、きわめて重要な資料で、オーストラリア国立図書館ならびに同国図書館事情は、これらの報告につくされるといってよい。

私は昭和50年9月から52年10月まで国立図書館に派遣されていたが、同館での業務について報告することは、屋上屋を重ねる趣きがあり、内心忸怩たるを覚えるが、求められるまま、同館での日本語資料を使つてのレファレンス・ワークについて記すこととした。

## II オーストラリア国立図書館： オリエンタリア

## 1. 職 員

オリエンタリア(正式には Oriental Study Room)は、オーストラリア国立図書館のサービス部門を構成する三つの図書部、すなわち、科学技術図書部 (ANSTEL: Australian National Scientific and Technical Library), 社会科学図書部 (ANSOL: Australian National Social Sciences Library), 人文科学図書部 (ANHUL: Australian National Humanities Library) のうちの、人文科学図書部に属する一セクションである。

職員は多少の動きはあったものの、全部で10名内外。うち、日本語資料をあつかう職員は5名、残りは中国語・朝鮮語・タイ語の各資料をあつかっていた。5名のうち司書はキャンベラの国立大学日本語科卒業の若い女性と私の2名で、これが資料の選書・整理・レファレンスにあたり、残る3名のうち2名は司書補助員で発注・受入業務を行ない、残る1名はカード作製のための日中両語のタイピストであった。毎月の購入図書冊数は平均約350冊、未整理滞貨図書約20,000冊をかかえ、人員は当然ながら不足で、できれば上級の日本人司書と司書補助員計2名は必要であろうと思われた。

## 2. 収集方針

1956年5月、同じキャンベラ市内にあるオーストラリア国立大学との間に重複購入をさげ、収集分野を明確にし、かつ予算を有効につかうため、収書分担に関する協定がむすばれた。これによれば、

国立図書館 (オリエンタリア)

歴史 (明治以降) 社会科学 美術

軍事 考古学\* 人類学\* 地理\* 地方史\* 逐次刊行物 新聞 書誌 一般参考書

国立大学図書館 (Oriental Studies Library)

歴史 (明治以前) 古典 哲学 宗教 考古学\* 人類学\* 伝記 系譜 地理\* 地方史\* 言語学 文学 一般叢書 書誌 一般参考書

(\*は、そのつど協議のうえ購入)

という基本的収集方針が確定された。

以来14年間、この二つの図書館はこの方針を墨守、時にはその予算の制限のため、国立大学図書館の依頼に応じてオリエンタリアが『国訳一切経・和漢撰述部』を購入したこともあったが、大体の線は守られてきた。

加えて、オーストラリア関係図書がある。日本で出版されるこの方面の図書数は、その関心の低さのあらわれか、寂寥たるもので、本格的な研究書は数えるほどしかない。しかし近年、旅行記・滞在記を中心としてふえる傾向は見受けられる。当館が日本関係欧文資料を収集しているように、同図書館もオーストラリア関係図書・逐次刊行物記事を積極的に集めている。オリエンタリアにおけるこの資料群は、オーストラリアーナ・コレクションとして、書庫の一角に別置してあり、その数は明治以降、100冊位のものであろうか。

この収集方針にしたがって選書し発注するわけであるが、果して、一定の水準に達している図書・逐次刊行物の何割を実際に入手し得たか。

『選定図書目録 1975年版』(日本図書館協会刊)の社会科学分野には、1,541タイトルを収録している。収集対象外の翻訳書140タイトルを除いた1,401タイトルが、

一応の選に入ったタイトルということになる。このうちオリエンタリアが収集しえたタイトルは330、そのカバー率は23.5%となる。

逐次刊行物については、『出版年鑑 1977年版』の、同じように社会科学分野に収録されているタイトル数640（ただし、市販されていない官庁刊行物・学術雑誌・紀要の類は含まれていない）のうち、わずかに110タイトルしか保有していない。そのカバー率は17.2%である<sup>(2)</sup>。

この数字は、日本語資料収集の国家的責任を果すべき国立図書館のものとしては、決して満足すべきものとはいえない。今後の発展が望まれるところである。

### 3. 蔵書の構成と特徴

如上の方針に沿って収集された日本語資料は、1977年6月末日現在、図書67,055冊逐次刊行物(年刊を含む) 3,267タイトル、マイクロフィルム5,523リールとなっている。このコレクションはオーストラリア国内では無論、南半球でも最大のもので、これを海外で最も大きな日本語コレクションを有するアメリカの統計<sup>(3)</sup>と比較しても、それほど遜色はない。しかも、アメリカの多くの図書館での日本語資料収集開始時期が戦前にさかのぼるのに比して、このコレクションの収集が開始されたのは、1950年代の初め、換言すれば僅々25～6年の蓄積である。海外における日本語コレクションとしては、いかにも急速な発展であり、この事実は同国の日本に対するなみなみならぬ関心のあらわれといつてよい。

いうまでもなく、取書という図書館にとっては根源的な仕事は、場あたりの方針ときまぐれな精神においてなされるべきでは

なく、反対に持続的で確立された意志の作業であるべきで、それを組織と予算が裏打ちするのだからなければならない。同館の場合は、きわめてめぐまれたケースというべきであろう。

前述の方針と日本人司書達の選書眼によって構築された蔵書は、14年後の現在どのような構成となっているか。

まず、強い分野としては、美術・現代史(明治以降)・書誌(蔵書目録を含む)・伝記・統計・政治・経済・社会・外交・辞(事)典類・年鑑類・政府刊行物。

普通の分野は、建築学・地理・法学・教育・明治以前の歴史・軍事・逐次刊行物・新聞。

弱い分野には、哲学・人類学・宗教・科学技術一般・農学・演劇・語学・文学・個人全集がある。

他にも異なつた性格の資料群がある。これらは、約2,000冊の伝記書、神道・古代史・軍事・教育勅語を中心とする元陸軍中将榊原昇造氏の旧蔵書2,500冊、更にロンドンのK. ポール社から購入した約1,500冊の雑書、さらには日本の外交文書から対オーストラリア関係の文書をひき出したマイクロフィルム、約500冊の社史などである。

加えて特筆すべきは、1953年12月に当国立国会図書館とのあいだにむすばれた政府刊行物交換についてのとりきめに基いて、当館から定期的に送付されている日本の官庁刊行物である。この資料群は、今では全く貴重なコレクションに成長している。このなかには当館刊行の書誌類も含まれていて、全体にその利用者も多い<sup>(4)</sup>。

以上、オリエンタリアの蔵書構成の概要を述べたが、さらにその特徴は何か。もとより希覯とすべき本は、管見には入らなか

った。蔵書の特徴は、その質の高さである。司書は書物の価値判断をいそいではならぬことは理解されるところだが、自らある種の判断はつくところ、その質の高さは日本の大学図書館クラス以上であろうと思われる。

翻訳書はそれがオーストラリア人の著作でない限り購入しないし、通俗書・一般むけの解説書も購入しない。入門書もそれが書誌的情報を含まなければ購入しない。したがって、残ったものは學術書・専門書・史(資)料集以外ないわけで、その結果はいきおい質の高いものばかりとなる。逆に言えば、それら以外にも購入したくとも予算の制限からできないというのが実情である。事実その質の高さは、たまたま日本からみえた研究者も驚く程であり、逆にまた、余暇の一興にと来館する在キャンベラの日本人家庭の奥様方のなげきともなるわけである。

レファレンス回答に最も必要な書誌・蔵書目録・事典の類の所謂参考図書群も、充実していた。ただ、各種業界の年鑑類は貧弱であったように思う。

#### 4. カードと公開目録

目録法は、英米目録規則を採用し、また一昨年から記述には ISBDM を使って、パンクチュエーションを入れた形のものとなった。件名には LC の件名標目表を適宜改めて使い、分類には、Harvard-Yenching Institute の分類表、著者記号には四角號碼をそれぞれ用いていた。この分類表は戦前にできたもので、とても現代の学問の発達にあわず、かなりの添加・展開を余儀なくされた。

LC カードについても付言せねばなら

ぬ。周知のように LC は日本語資料を東京事務所を通して積極的に収集し、大そう美しくカードを作製・頒布している。このカードをオリエントリアでは一括購入し、そのなかから受入図書に対応するカードをさがしてきては分類・著者記号その他を打ち込んで複製している。この方法は、オリジナルにカードを作る手間と時間を省く意味でまことに有効な方法で、どれほど効率的な整理ができたかわからない。

こうしてできあがったカードは、目録にくりこまれ、各大学図書館にも送付されることになる。オリエントリアの公開目録は、以下のとおりである。

「著者・書名目録」

「件名目録」(中国語資料と混排)

「オリエンタル図書総合目録」

「逐次刊行物目録」

このうち、「オリエンタル図書総合目録」は、1956年に発足し、20余年をへた現在参加館17館、カード枚数 145,000 枚、オーストラリアならびにニュージーランドにおける日本語・中国語・朝鮮語の図書所蔵館を知る唯一の総合目録である。参加館は両国における東洋語の所蔵館を網らしているといつてよい。煩をいとわず館名をあげてみれば、

オーストラリア国立図書館・同国立大学図書館・キャンベラ教育大学図書館・連邦科学技術研究機構図書館  
グリフィス大学図書館・マッセイ大学図書館・マードック大学図書館・メルボルン大学図書館・クィーンズランド大学図書館・シドニー大学図書館・西オーストラリア大学図書館(以上オーストラリア)・オークランド大学図書館・ヴィクトリア大学ウェリントン図書館(以上ニュージー

ラシド)

各館から送付されてくるカードのチェックも仕事のひとつであったが、カードの記述は各館区々で、書誌調整は十分には行なわれてはいない。この総合目録をマイクロフィルムで刊行頒布する計画が昨年から実施に移され、やがて刊行されるだろう。

逐次刊行物の目録には、『オーストラリア国立図書館所蔵日本語逐次刊行物目録』がある。この目録は1974年12月末現在所蔵タイトル約2,800を収め、A4判、189ページ、1977年10月に刊行された。

前述の図書の総合目録とならんで、逐次刊行物の総合目録も、3,300タイトルを保持し、そのマイクロ化も1975年に計画され、すでに22の参加館を得、今度は徹底した書誌調整のもとに刊行されようとしている。この二つの総合目録刊行のあかつきには、利用者は無論各図書館の受ける便益は計り知れず、中央館としてのオリエンタリアの果す役割はますます重要なものとなることは必定である。

### 5. オリエンタリアの現状

オリエンタリアの他言語の資料は、中国語は日本語資料より多く図書93,882冊・逐次刊行物1,989タイトル・マイクロフィルム5,228リール、朝鮮語はそれぞれ、9,467冊・542タイトルである。全体で17万冊以上の図書、5,800タイトルの逐次刊行物、11,000リールのマイクロフィルムを所蔵する図書室である。その言語の特殊性のゆえに、ここの資料は一般の英・仏・独・露の資料の流れ・分類法・目録・書庫からは完全に別個のものとなっていて、いわば図書館のなかに図書館があり、またそのなかで言語別の独立した体系があるという三重

のいれ子型をなしている。そのうえ各言語ごとにそれぞれを母国語とする職員がいて、管理運営はなみたいではない。その経営の全きを得たのは、主任の王氏の細心にして篤実な性格によるところが多い。

## III オーストラリア全体における 日本語コレクション

### 1. 蔵書の統計

1977年8月、国立図書館は、オーストラリア国内の主要な大学・公共・専門図書館に質問状を送って各館における東アジア資料の書誌調整について調査した。その結果は、同年9月オーストラリア国立大学図書館で開かれた「東アジア図書館セミナー」で発表されたが、同時に、各館の東アジア言語資料の所蔵状況を知らしめた。これを改変して日本語資料のみについて掲げたのが表1である。ただし、日本語資料を少なくとも3,000~4,000冊を所蔵するといわれるモナシュ大学、西オーストラリア大学の両図書館からは回答を得ず、この表に含まれていない。

この表から日本語資料についていえることは、

①資料収集開始時期が60・70年代に集中していること。

②国立図書館と国立大学図書館の所蔵冊数がとびぬけて多いこと。就中、国立図書館の所蔵冊数が抜群で、全国で所蔵されている日本語図書の51%を所蔵し、さらに、国立大学の所蔵分を含めれば、77%は2館によって占められていること。

③逐次刊行物においてこの傾向はなお顕著であり、国立図書館1館で75%、国立大学を加えれば、83%がこの2館に集中して

表1 オーストラリアにおける日本語資料

図書館名	収集開始時期	図書(冊)	逐次刊行物(タイトル)	マイクロフィルム <sup>a</sup> (リール)
オーストラリア国立大学	1950 <sup>s</sup>	33,000	375	6,050 <sup>b</sup>
キャンベラ教育大学	1970	250	—	—
連邦科学技術研究機構	1930	600	60	—
グリフィス大学	1974	3,000 <sup>a</sup>	35	674
ラ・トロープ大学	1965	38	—	—
マードック大学	1974	300	5	—
国立図書館	1950 <sup>s</sup>	67,055	3,267	10,751
特許庁	1966	—	16	—
パース市立	1975	88	—	—
ヴィクトリア州立	—	550	4	—
スィバーン工科大学	1972	1,200	3	—
アデレード大学	1975	1,012	30	500
メルボルン大学	1962	5,564	101	227
ニューキャッスル大学	1976	750	10	—
ニューサウス・ウェルズ大学法律	1970	145	—	2
クィーンズランド大学	1966	8,000 <sup>c</sup>	340	—
シドニー大学	1968	10,729	112	467
合計		130,781	4,358	18,671

(1977年6月30日現在)

a 中国語・日本語との合計 b マイクロフロッジューも含む c マイクロフィルムも含む

いること。

④マイクロフィルムも、57%を国立図書館が、国立大学図書館所蔵分をいれると、89%となること。

⑤この結果、同国における日本語資料の83%強は首都キャンベラに偏在していることになること。

## 2. 大学図書館の日本語資料

この質問状は純粋に書誌調整にかんするもので、惜しむらくは、購入予算・収集分野・職員数(司書の母国語までを含めての)などの周辺の(実はこれが大事なのだが)項目まで含んだ総合調査ではなく、収集分野

については、触れるところはない。

しかしながら、たとえば、オーストラリア国立大学図書館の収集分野は、人文科学であることは前述のとおりであり、その他の主な大学図書館についても、金中利和氏と高橋弘氏の報告<sup>(5)</sup>の如く、日本語・文学・日本史・文化史を主とする分野に、そう変化はないであろう。ただ、この統計にはあらわれてはいないが、ヴィクトリア州のモナシュ大学では、日本語および日本文学に加えて社会科学の分野の図書を収集していると聞かすが、その現況はさだかでない。

いずれにせよ、これらの大学図書館の日本語資料を実際に訪問してみると——といっても私が訪ねたのは、国立大学・キャン

ベラ教育大学・シドニー大学・メルボルン大学・オークランド大学（ニュージーランド）の5大学にすぎぬが、国立大学図書館を除けばそのコレクションは、正直のところまずお寒い限りで、司書（たいていは中国人が日本語資料もあつまっている）の抱いている不満を聞かされる。ある図書館では、年間の購入予算が45万円程で、とても満足な収集は思いもよらず、時折日本の文化交流基金から寄贈される図書が実に貴重だというので、市内にいくつもある日本商社に呼びかけてみたらと勧めたら、一度やって何の音沙汰もなかったという話であった。大学図書館の場合、国立大学を除けば、人もいない金もないで、今後よほどのことがなければ、急速な発展は期待できそうにない。

このような大学図書館の現状は、その主な顧客たる日本研究者には、どのように受けとめられているのであろうか。アデレード大学のS.S. ラージ氏は、国立大学と国立図書館の資料は評価するものの、その他の大学のそれについては全く悲観的で、結局のところキャンベラに行くほかはなく、行ってみてもすべての研究者の探求心を満足させてはくれないので、研究を完成させるにはどうしても日本へ行くしかないという意味のことを述べている<sup>(6)</sup>が、おそらく事実であろう。

### 3. 日本研究者たち

さて、その日本研究者であるが、たとえば、1963年当時のオーストラリア国立大学の日本研究者については、中田吉信氏の紹介があり、さらに3年おいて金中利和氏は主要な大学の日本研究者について報告している<sup>(7)</sup>。さらに、その後10年をへた現在の

日本研究者については、ふたたび前記のラージ氏の報告がある。

この報告は、主要な五つの大学とその他の大学に籍をおく26人の日本研究者とその研究分野を紹介し、1976年に設立された豪日基金を通しての政府からの財政的援助、図書館資料、さらには1976年に創設された「オーストラリア・アジア研究協会」の活動にふれ、日本研究の将来のみとおして終わるもので、図書館資料の項での国立図書館と国立大学図書館の数字のとりちがえを除けば、現在の同国の日本研究の現況を知ろうとて、好個の論文といえよう。

紹介された26人のほかにも日本研究者とまではいかずとも、日本語教師クラスの教授陣、さらに、修士・博士課程に学ぶ学生、学部の子生まで含めれば、その数はずい分と多くなる。ちなみに1970年11月の調査<sup>(8)</sup>では、同国での日本語教育機関は56、教師数106、学生数2,745名（この数字は高校・大学・成人学校等を合わせたもの）であったが、7年後の1977年には、学生数は中学・高校レベルで5,000名、大学成人学校レベルで4,000人と3倍にふえている<sup>(9)</sup>。これらの学生は、日本研究者の予備軍ともいべき存在で、事実、国立その他の大学から、たとえば日本の政治や政党・近代文学・近代教育史などの有能な若手の研究者が育っている。

そのほかにも、日本研究者とはいえぬまでも、特定の分野で日本の研究動向や統計を調査する調査マンが、各省庁・政府機関・研究所・病院・会社にいるし、日本観光旅行の際買ってきた錦絵の図柄の故事来歴を知りたがる類のにわか発心のジャパノロジストにいたっては、浜の真砂というべく、その潜在性はおそるべきものがある。しかしながら、すでに専門分野を持つ日

本研究者についていえば、言語のハンディキャップはなお克服し得ても、外在的ハンディキャップ——研究資料の偏在・情報不足・資金不足・大学所在地間の長すぎる距離(東端のシドニーから西端のパースまで、特急列車で3泊4日、ジェットで6時間)——になやまされ、キャンベラに住むラッキーな日本研究者を除けば、かなりの孤立感・疎外感を持っているといえよう。

#### IV オリエンタリアにおける レファレンス・ワーク

オーストラリアにおける日本語資料の現状が如上のものである以上は、キャンベラの二つの国立機関が所蔵する合計10万余冊の図書、3,600タイトルの逐次刊行物、16,000リールのマイクロフィルムが、いかに重要なものであるかを理解していただけたと思う。好むと好まざるとにかかわらず、この二つの機関は、事実上同国内における日本研究の最終的なよりどころとなっている。就中、国立図書館は、その蔵書の質・

量の点からしても、全国民に奉仕する国立図書館の立場からしても、こと日本にかなする情報についての最終的責任を担っているといても過言ではない。

したがって、日常受理するレファレンスは、予想されるよりははるかに多く、内容も多岐にわたっている。以下に同館でのレファレンスについて述べる。ただし、お断わりしておかねばならないが、以下に記すことは、すべて直接私が受理したレファレンスについてのみの記述であり、他の司書の方も加えれば少しはふえるが、その大体において変化はない。

##### 1. レファレンス依頼者

下に掲げるのは、依頼者・種類別の受理件数表である。

ただしこの依頼者の分類は便宜的なもので、来館した閲覧者からのレファレンスでも、その所属機関がはっきりしている場合には、機関の方に分類した。したがってここにいう個人とは、その所属の明確でない閲覧者をいう。

表2 レファレンス受理件数

依頼者	レファレンス内容	所蔵(機関)調査	文献調査	書誌的 事項調査	事実調査	その他	計
大学(図書館)		174	42	32	2	—	250
個人		39	27	1	12	16	95
政府機関		29	31	—	26	4	90
館内職員		10	2	19	6	5	42
会社・マスコミ		4	5	—	5	1	15
病院・研究所		7	—	—	—	—	7
小計		263	107	52	51	26	499
日本大使館		135	6	1	19	5	166
合計		398	113	53	70	31	665



件数の多かった順に書けば、大学（図書館）、日本大使館、個人、政府（州政府を含む）、国立図書館職員、会社・マスコミ、研究所・病院である。

大学図書館ならびに教員・学生からのレファレンスはその50%をしめるのは、先に記した資料の偏在の事情から、当然であろう。個人のなかにも、大学の項へ入れるべき人も多いと思われる。

ではそのうちわけはどうだろうか。

#### <大学図書館>（多い順）

オーストラリア国立・クィーンズランド・モナシュ・シドニー・フリンダース・ニューイングランド・西オーストラリア・マドック・メルボルン・グリアフィス・ラトロブ・ヴィクトリア州立・ニューサウスウェルズ州立・タスマニア州立・アデレード・キャンベラ教育（以上16校オーストラリア）  
・オークランド・ワイカト・カンタベリイ（以上3校ニュージーランド）  
・バプアニューギニー

大学からの場合は、直接教授陣・学生から来る場合もあるが、多くは後述のようにその図書館を経由してテレックスでの依頼で、その場合、原依頼者は不明である。いずれにせよその依頼内容からみて、その大学の日本研究者または大学院クラスの学生であることはまちがいない。

また国立大学からの場合には、純粋に同大学内からの依頼によるものと、いったん同大学で受理した他大学・機関からのものを同館で回答できずにまわしてくるものと、二種類あった。

#### <政府機関>

農業経済庁・連邦科学技術研究機構・大蔵省・外務省・総理府・議会図書館  
・北部地域省・厚生省・最高裁判所・

中小企業庁・第一次産業省・産業援助委員会・西オーストラリア州政府

この場合の依頼者は、図書館からのものは少なく、調査員あるいは業務担当者が直接来館し、特定分野のしかもこまかい統計数字等を求められることが多かった。

#### <会社・マスコミ等>

ANSETT・Eastern Nitrogen Ltd.・Alcan Australia Ltd.・QUANTAS・Information Electronics Ltd.・特許会社・「ヘミスフェア」誌編集部・キャンベラタイムス社・オーストラリア放送委員会

この依頼者の場合は、特定分野についての所謂文献調査が多く、また、日本語は全く読めない場合が多いので、少量ならば本来はしないことになっている翻訳サービスも余儀なくさせられた。

#### <在キャンベラ日本大使館>

日本大使館にも日本語の資料はないが、オーストラリア人向けの英文資料が多いため、事実調査・文献調査・ならびに資料の館外貸出の要請をうけた。殊に、前記オーストラリア人は、館員のみならず、家族にも好評であり、華道・料理・小説とならんでよく利用された。表2で、大使館からの調査依頼が多いのはそのためである。

#### <病院・研究所等>

クィーンエリザベス病院・セントジョージ病院・パースメディカルセンター・王立小児科病院・BHP 中央研究所・ヴィクトリア州立農場・国立生物研究所

#### <国立図書館職員>

オリエンタリアの同僚・一般参考課員・収書係・写真課員・他

## 2. レファレンスの経路

レファレンス経路は、口頭・文書・電話と当館で受理する場合と全く変わりはない。電話によるレファレンスは、たしかではないが、およそ50件位であったろうか。オーストラリア英語になれない着任当時は、相手の言っていることが聞きとれず、ゆっくり話してもらってやっと質問の意味を理解した場合もあった。

珍しかったのは、テレックスによるレファレンスであった。

下に一例をあげる。

T中

LI BAUST AA62100  
UNIVQLD AA40315

QU77/4437      LOAN      26.7.77  
KIDO, KOICHI  
KIDO KOICHI NIKKI (J68-844)  
TOKYO, 1966  
VERIFIED: NUC 1963-68

上記の例を説明すれば、以下のとおり。

1行目：オーストラリア国立図書館のテレックス番号(あて名)

2行目：依頼者クイーンズランド大学図書館(University of Queensland)のテレックス番号(発信者)

3行目：左、クイーンズランド大学のファイル・ナンバー。中央、レファレンス目的(この場合は館外貸出申し込み)。右、依頼の日付。

4, 5, 6行目：資料名、請求記号、書誌的事項(かっこ内が請求記号)

7行目：レファレンス・ソース(この場合は、米国議会図書館刊の『全国総合目録1963-68』)

このテレックスによる即時レファレンス

は、直接オリエントリアに来るのではなく、受信所で受理ののち、「館外貸出及び所在調査課」(Loans and Location Section)に回付され、そこで館内の一般資料を調査のうえ、オリエントリアにまわされる。もっとも上例の場合は、オリエントリアの請求記号が入っているので、直接オリエントリアに回付された。

3行目のレファレンス目的は、この項のほかに「所蔵(機関)調査」(Location)とか「複写依頼」(Xerox)があって、なかにはPLEASEの一語を加えるのを常とした館もあった。さすがに、BIBLIOGRAPHY PLEASE というのはなく、その場合はこちらの手数を察してか、実に丁寧な手紙をもらうのが通例であった。

このテレックスによるレファレンスは、大学図書館と国立図書館とを結ぶもので、いわば、プロがプロに依頼する性質のものだけに遺漏はなく、必要な書誌的事項も必ず入っていた。

なお感心させられたことは、レファレンス・ソースがきちんと書かれていたことであった。後述するがたとえば化学の雑誌論文の場合ならば CHEMI. AB. (ケミカル・アブストラクト)の何号何ページとあって、タイトルが不明の場合(ローマ字で表記された日本語を日本人以外の人がタイプするのはかなりやっかいらしく、しばしばミスタイプにお目にかかる)など、大そう助かる。ソースが書いてない場合でも簡潔に REGRET UNABLE TO VERIFY などとあって、たった一行にも万感がこめられている思いがする。

さらにつけ加えるならば、自館でどこまで調査したかを書いてある場合もあり、たとえばそれが逐次刊行物の場合、NOT LISTED SALSSAHなどとある。ちなみ

に SALSSAH とは加除式の「オーストラリア逐次刊行物総合目録：社会科学・人文科学編 (Serials in Australian Libraries: Social Sciences and Humanities)」のことである。一語いくらと値段の決まっているテレックス文章のなかでさえ、相手方の手間を少しでも省かんとする気持が読みとることができ、感心させられた。

### 3. レファレンスの種類と内容

それでは一体どのようなレファレンスを受けたか。そのすべてを紹介することは無論できないが、以下にその一部を種類ごとに示すにとどめる。

#### (1) 所蔵(機関)調査

表2にもあるとおり、全件数の58%はこの性質のものであった。しかも、そのうち43%は大学(図書館)からのものである。しかも、日本大使館からのものが、おおむね館員・家族のための館外貸出であることを考えれば、大学からの問い合わせの数字はさらにふえて、66%以上と思われる。

特定の文献の所蔵の有無をたずねるこのレファレンスは、国立大学からは電話で、地方の大学からは先記のテレックスで依頼されることが多かった。多くは研究の途次必要となった性格のものらしく、レファレンス・ソースをみると、書誌・所蔵蔵書目録にまじって、学術研究書収載の引用論文も多かった。

この種類のレファレンスの場合の図書と逐次刊行物とのタイトル数の比較は、大きな意味はないが、全件数398件のうち、図書が273タイトル、逐次刊行物125タイトルでおおよそ7対3の割で図書の方が多かった。日本大使館の数字を除けば、その比

率は5対5で、さらに大学(図書館)からについてのみいえば、4対6でこの比率は逆転し、逐次刊行物の方が多くなる。では、大学(図書館)は、どの分野についての所蔵(機関)を問いあわせてくるか。これをまとめたのが表3である。

表3 大学からの所蔵(機関)調査  
依頼の分野

	図 書 (タイトル)%		逐次刊行物 (タイトル)%	
人文科学	27	40.2	23	21.4
社会科学	32	47.7	27	25.2
科学技術	4	5.9	51	47.6
総合(総記)	4	5.9	6	5.6
	67	100%	107	100%

図書の場合は約半数が社会科学、逐次刊行物の場合は約半数が科学技術の分野のものであることに気付く。社会科学が主たる、守備範囲のオリエンタリアは、図書の場合の充足率はかなり高かったが、自然科学の逐次刊行物についての充足率は低かった。この傾向については、すでに高橋弘氏の指摘<sup>(10)</sup>するところであるが、逐次刊行物の使用言語の問題も含めて、後述したい。

この種のレファレンスでは、図書の場合まずオリエンタリアの「著者・書名目録」のカードをくり、所蔵していればすぐに発送するし、未所蔵ならば「オリエンタル図書総合目録」を検索して所蔵館の有無を調べ、あれば所蔵館の請求記号を知らせる。

逐次刊行物の場合には、1974年12月末までの所蔵分ならば『所蔵日本語逐次刊行物目録』を、1976年以降の所蔵分はカード体の目録を検索する。さらに国内の所蔵分については、前記のカード体の「オリエンタル逐次刊行物総合目録」を検索する。しかしながら、各大学図書館とも文学・語学を

中心として収集しているため、重複が多く、検索してもほとんどの場合、「国内所蔵機関ナシ」のケースであった。

少なくとも日本語逐次刊行物に関するかぎり、冊子体の所蔵目録の刊行により、所蔵調査依頼のレファレンスは今後減少し、かわりに、文献複写依頼が増加するであろう。この傾向は、一足さきに刊行された中国語逐次刊行物目録『漢洲國立図書館中文期刊目録』(1976 100p A4)についても認められたことであった。

## (2) 文献調査

次に多かったのは、一つの分野または主題について、どのような資料を所蔵しているか、未所蔵でも日本ではどんな文献が出ているかの調査依頼であった。この種のレファレンスは、107件で大学からがやはり最も多かった。

日本の庭園の写真をみたいという小学生から、曼荼羅に関する文献目録の作製依頼まで、所蔵調査をいわば点の調査であるとすればこの調査は面の調査の性格を持つといえよう。正直の話、所蔵資料の制限はあったものの、この仕事が最もおもしろかった。

以下にその一部分を紹介する。

### <大学(図書館)から>

- ・井上毅の教育政策について。
- ・9世紀における大学寮。
- ・13世紀における武士の抬頭についての文献(英語文献も含む)。
- ・日本女子大学について。
- ・ロッキード事件——その構造汚職の側面。
- ・ロッキード事件と市民運動。
- ・明治時代の職業教育についての新聞記事。

- ・経済史に関する書誌の所蔵状況。
- ・宮沢賢二に関する所蔵文献。
- ・耐震構造建築に関する文献。
- ・パプア・ニューギニアの経済についての邦文文献。
- ・井上ひさしの戯曲。
- ・明治時代の洋風建築の写真。
- ・日本美術史上における空海について。
- ・曼荼羅に関する文献目録。
- ・満蒙支との近代外交史。
- ・大田南畝と山東京伝の作品の所蔵状況。

- ・柳沢吉保に関する文献。
- ・増鏡に関する最近の研究文献。
- ・その他。

### <政府関係機関から>

- ・相撲の写真。
- ・都市計画——特にオープン・スペースの使い方の例。
- ・総選挙での政党別支持数とその分析。
- ・原子力関係法。
- ・その他。

### <会社・マスコミから>

- ・警女をテーマとした浮世絵。
- ・日清戦争の錦絵。
- ・日本企業における厚生施設と余暇の問題。
- ・コンピュータを使っている新聞紙面作製ならびにインデックス作製にかんする文献。
- ・修学旅行——そのシステムについて。
- ・春信について。
- ・その他。

### <個人から>

- ・いけばなについて。
- ・日本人の思惟方法について(英文文献も含む)。
- ・日本刀の製作方法。

- ・マッサージの方法。
- ・江戸時代の商人——もの売り——の浮世絵。
- ・禅の実際——写真——。

この種のレファレンスの特徴は、主として人文科学・社会科学の分野に関するものばかりで、記録に残るかぎり、科学技術の分野のものは二、三の例外をのぞいて、ほとんどなかった。これは、所蔵調査の半分近くが科学技術の雑誌論文であったことを考えると、注目すべき現象である。

### (3) 書誌的事項調査

この種のレファレンスは、ほとんどが館内職員を含めた図書館からのもので、たとえば、研究社の『新英和大辞典』の改訂版の出版年を問うものや、さらには、タイトルのローマ字表記方法もこの項に含めた。したがってここには純粹に図書館技術をも含めた数を出してある。

### (4) 事実調査

事実調査で求められたのは主として統計数字・団体の住所及びローマ字表記・さらには人名の調査で、上記の三調査とはことなり、政府機関からの問い合わせが最も多く26件に達した。その一例を示せば次の如くである。

- ・南太平洋における日本漁船のマグロ漁獲量とその種類。
- ・最近の大都市における消費者物価指数。
- ・太平洋戦争中における肉牛屠殺数とその消費量。
- ・ワインの年間生産量。
- ・砂糖・ブドウ糖・サッカリンの年間生産量。
- ・最近10年間の和歌山県の人口統計。

- ・産業構造審議会のメンバー。
- ・その他。

### (5) その他のレファレンス

その言語の特殊性の故に、オリエンタリアが日本に關してのよろず相談案内的性格を持たざるを得ないのは当然で、思いもよらぬことをたずねられることもあった。

その代表は、美術・骨董品の鑑定であった。もちこまれた品物は、日本刀四振・旧日本軍軍標5枚・天保通宝2枚・浮世絵(含錦絵)13枚・薩摩焼のつぼ1個・産地不明の大つぼ写真1枚・浴衣(文字が染めてある)一枚・落款拡大写真1枚などであった。この場合求められるのは、それらの品々についての情報というよりもむしろ現在の市場価格で、これについては不明の点が多く、依頼者に満足を与ええたか疑問である。

この種のレファレンスのうちで最も困惑させられたものを紹介する。1902,4年頃英国のビジネスマンを下宿させていた東京の鈴木という寺院住職の本名と寺院名、という個人からのもの。幸い国立大学図書館に大正8年刊の『現代僧名辞典』があり、6名の鈴木氏をみい出したがとてもしビジネスマンを下宿させているとの情報までは記載しておらず、万止むを得ず、都立中央図書館の東京室を紹介した次第であった。

## V レファレンス雑感

以上長々と、レファレンス・ワークの場としてのオリエンタリアとそこで行なわれたレファレンス・ワークの實際を述べてきたのであるが、最後にその傾向・問題点を感想をまじえながらまとめてみる。

## 1. 司書の問題

オーストラリア国内で日本語資料を扱う司書で日本人は、国立図書館と国立大学図書館に各々一人ずついるだけ、さらに大学で日本語を学び司書の資格をとったオーストラリア人が、やはり同機関に一人ずついるだけである。他の大学図書館はすべて中国人司書が中国語とともに日本語資料も扱っている現状である(昨年7月まで、メルボルン大学には日本人司書がおられたが、帰国された)。

整理業務はしばらく措くとしても、レファレンス業務——所蔵調査ならばいざ知らず多岐にわたる高度に専門化されたレファレンス——を、処理することは、日本語を母国語としない人、あるいは日本人でも適当な訓練を受けていない人にとっては、その個人的能力は別問題として、かなりの負担となる。

そこで必要となるのは中国・朝鮮語も含めた所謂オリエンタル・ライブラリアンの養成であるが、現在のところ、これを養成する機関は同国にはない。早い話、その必要がないといってしまうえば、そのとおりであるにせよ、それでは人間は育たない。当館から招かれている代々の司書は、図書館の実務を遂行するのが本務であって、個人的に相談や質問を受けることはあっても、残念ながら、レファレンス技術を教える権限もないしその立場にもいない。

この数年来の財政困難は、この国の日本研究にも大きな影響を与えた。もはやかつての「酒とバラの日々」は終わり<sup>(1)</sup>、大学図書館のこの方面の予算が劇的にふえることは、夢物語であろう。専任の日本人司書を招聘することなど、できそうにない。

とすれば、現在いる司書を育成するほかはない。有資格司書の場合、その整理技術については習熟しているので問題はないが、レファレンス・ワークは未だしの感があるので、これを補強すべきであろう。たとえば、短期間であれこれらの司書のうち一人でも当館に来さしめて、一般参考課で実務を習わせるなどは、まことに有効な方法となろう。

## 2. 科学技術分野の逐次刊行物

他館に比べてオリエンタリアの図書購入費が潤沢であるとはいえ、その範囲内での収集には当然限界がある。守備範囲の社会科学の分野においてさえ、先に述べたように20%内外のカバー率で決して満足できない状態でない。人文科学は国立大学にまかせるとしても、科学技術分野——殊に逐次刊行物——の貧弱さは、1956年に確立された取書方針にはもりこまれていなかったとはいえ、まことに目をおおうばかりである。しかし、20年前の不明を指摘すべきではなく、逆にそれだけ当時の日本のこの分野は評価されていなかったというべきであろうか。その20年が裏目に出たともいえる。

たとえば、大学から所蔵調査依頼を受けた科学技術の論文収録誌は51タイトルあった。このうち、未所蔵が28タイトル、所蔵が23タイトルであった。所蔵していても、大部分は、3、4年前から収集を開始したもので、バック・ナンバーまでは揃っていないのが現状である。しかしながら、揃わぬまでもこの科学技術分野の逐次刊行物コレクションが、同国内でどれほど貴重なものとなりつつあるかは論をまたない。しかも、この要請に対応して、ここ数年来、科学技術各分野の基礎的逐次刊行物を積極的

に収集しようとしているので、今後、各館からの依頼にかなりの程度まで対処できるようになるものと思われる。

司書の関心外のことであるが、不思議に思われたのは、その典拠と言語の問題である。つまり科学技術系研究者が、どのようにしてその論文の所在を知り、論文のコピーを入手しても果して読めるのかどうかの問題である。

そのソースは、学術雑誌・博士論文の引用のものもあったが、多くは、CHEMICAL ABSTRACTSをはじめとするアメリカの索引誌であった。帰国後の調査では、CHEMICAL ABSTRACTS 収録の日本の科学技術逐次刊行物は、米・露・英について7.5%(1973年)と第4位で<sup>(12)</sup>、特許情報にいたっては、30.7%(1975年)<sup>(13)</sup>と一番多く、納得がいった次第であった。

日本研究者と異なり、これらの科学技術研究者が日本語を理解しうる場合はきわめて例外的なケースである。大体どのようなことが書いてあるのかを教えてくださいとよく質問された。しかしながら数式や専門用語にあふれる「高度に専門的な」それらの論文を理解することは、とてもできない相談で、わからないという点ではこちらも同じ、全部英文ならずともせめて英文の論文要旨でもついていたらと思いつつながら、現物を前にして顔を見合わせた経験が何度もあった。

欧米語使用誌、日本語・欧米語共用誌、日本語使用誌であっても欧米語論文要旨を持つ雑誌を「日本語以外への読者への接触可能誌」といい、科学技術全分野での29%がこれにあたるというが<sup>(14)</sup>、願わくば、その比率を少しでも上げてもらいたいものである。事実その要請は多いのである。

### 3. 資料の限界

先にあげた収集分野と限られた冊数を背景として行なうレファレンスには、当然のことながら限界がある。

簡易な所蔵調査の場合でも、未所蔵とわかれば、他に所謂類縁機関があって即刻電話で照会することはできない。結局、国会図書館の住所と請求記号を教えて、コピーを入手するように勧めたり、当該機関を教えるほかはない。

さらに、たとえば地元の新聞社の Canberra Times 社から依頼された、「日本におけるコンピュータを使つての新聞紙面編集とインデックス製作の現況」となると、もうお手あげで、「雑誌記事索引」で論文をみつけ出しても、結局はその論文収載誌は未所蔵で、こういう論文・報告が出ていますと教える段階でとまってしまう。このケースの場合、朝日新聞社に手紙を書いて資料を送っていただき、その要旨を翻訳して伝えたが、後日、さらに英文の概要を送って下さったので本当に助かった。

責任を回避する訳ではないが、資料に限界があり、自分自身でも不確かな場合には、むしろ積極的に日本の諸機関を紹介し、直接問い合わせるようにも勧めた。あやふやな情報を提供するよりは、また、せっかく手間ヒマをかけて来館した依頼者を手ぶらで帰すよりは、まだましだと思ったからである。

### 4. 言語の壁

オリエンタリアの資料を読みこなし得るオーストラリア人の数は決して多くはないが、国立図書館として一般国民に奉仕する立場上、日本語を一字も解しない一般国民

へのサービスも等閑に付し得ない。まして、否、専門家でないこれらの人々が日本のなにものかについて知りたいと思って手紙をよこしたり来館するのはよくよくのことであるから、この一般の人に対してこそ専門家に勝るとも劣らぬサービスが必要となってくるのである。

彼等の求めるところが、たとえば写真や絵をみせてたちどころに理解してもらえらる性質のものである場合はいい。かんたんに出てくる数字ならば救われる。

難かしいのは、文章を読んで自ら認識してもらわなければならない性質のものである。当方がもっている通りいっぺんの常識的説明を超える場合である。幸いにズバリ求めるところを記した資料は何冊か出てすでに机上にある。それまでで司書の役目はたしかに終わりの筈なのに、それ以降は一個の日本人としての感慨があるばかり、なんとかしてつたない英語で、目次ぐらゐまでは翻訳し得ても、とても内容万般にわたる翻訳の時間の余裕はない。

そこで登場するのが日本関係欧文図書目録と一階の公開目録室にある一般洋書の辞書体目録と分割目録である。

日本関係欧文図書目録としては、周知のように、“Catalogue of materials on Japan in Western Languages in the National Diet Library formally in the collection of the Ueno Library”, “A Classified Catalogue of Books on the Section XVII. Japan in the Toyo Bunko acquired during the years 1917~1956” “Union Catalog of Books on Japan in Western Languages” や国際文化振興会図書室の分類目録、があるが、加えて昨年9月刊行された『国立国会図書館所蔵日本関係欧文図書目録 昭和23年—50年』があればどれ程

助かったか。この目録をオリエンタリアで実際に使う機会はなかったが、有力なツールとなることはまちがいない。しかしながら、これらのツールのなかから適当なタイトルをさがし得たとしても、数分ののち、階下の二種の公開目録中に同じカードを発見し得るかは自ら別問題である。くわしく数えてみなかったので正確な数ではないが、日本関係図書およそ3,000タイトル中に、求めるタイトルを見出すことは結構多かった。

日本語から英語を隔てる壁があるとすれば、逆に英語から日本語を隔てる壁も当然あり、その好例は、逐次刊行物の英語タイトルである。たとえば“Japanese Journal of Fertility and Sterility”とあるのをみてたちどころに「日本不妊学会誌」であると判ぜられる 司書は、そう多くはないと思う。多い方のひとりである私は、当館刊行の『日本科学技術逐次刊行物目録 1967年版、1974年版』の両冊の恩恵をこよなくこうむった一人である。

## 5. 外からみた当館の書誌類

レファレンス・ワークを行なう際によく使用した当館刊行の書誌は、

全日本出版物総目録・納本週報（全日本の未刊分について）・蔵書目録（帝国図書館の目録を含む）・雑誌記事索引（人文社会・科学技術両編）・全集叢書細目総覧・明治期刊行図書目録・日本科学技術逐次刊行物目録1967、1974・和雑誌目録・人物文献索引

などであった。これらの書誌類は、当館の一般参考課の参考調査受付台で日常最もひんぱんに使われるものであって、その意味では不思議でも何でもない。



しかしながら異なるのは、使う時の気持である。これらを使う時は、もうあとがないという一種の緊張感がある。背後に専門参考各課があるべくもない。細かい主題文献目録類がそろっている一般参考図書室があるはずもない。誰にたずねようにもその相手はいない。孤立無援である。たよりになるのは自分だけで、しかもその自分がたよりにないときている。これらの書誌類が切りふたである所以である。

おそらく上記の書誌類を使わずにすませた文献調査依頼などは、半分位であろうと思う。殊に『雑誌記事索引』は、その累積版が刊行されて、文献目録を作製するうえで、大へん役に立った。『全日本出版物総目録』は書誌的事項を知るうえで（刊行の遅れについて問題はあがるが）有用であった。『全集叢書細目総覧』も索引がついてどれ程助かることであろう。

当館職員が当館刊行物をほめるのは芳しくないが、他館の職員として勤務していた時に体験した事実なので、お許しをいただきたい。ただ、ひとり当館刊行のものに限らず、一般に、書誌の編さん刊行は、払われた労力と経費の割には、その意義と価値との評価がいまだに低すぎるこの国の精神的風土を、常々快く思っていない故もあって、ひとこと書いておくのである。

## 6. おわりに

それにしてもレファレンス・ワークとは一体何であろうかと、帰国してつくづく思う。

求める資料にたどりつくお手伝いをして、その資料があれば、それでおしまいのはずである。未所蔵の場合でも、所蔵館を調査し、その結果を告げれば、これで終わ

りのはずである。あるいはまた、主題文献目録を出してきて、他の資料の存在を示せば、そこでおしまいのはずである。要するに司書としての仕事は「完結」する。

しかしながら、その完結は依頼者とのつながりの完了を意味しない。換言すれば、依頼者は、時として、きわめて饒舌でさえあり、なかには、資料とは全く関係はないが彼がいかに日本通かをほのめかすに足る話題について長々と話しこんだりする人もいて、こうなると図書館に来ておしゃべりを楽しんでいるといつていい。殊に、午前10時と午後3時のお茶の時間などに来あわせると、話ははずんで、司書と閲覧者とのかきねなどすでになく、ただ友達同士がよもやまの話をしているにすぎなくなる。その他愛もない話のなかで、ひょいと、蔵書のなかで欠けている資料の存在を教えられたり、他の日本研究者の業績についての情報を得たり、その他教えられることがまことに多かった。

無論すべての依頼者・閲覧者と私の関係がそうであったわけではないが、本来、レファレンス・ワークとは、人と人が資料を媒介として出会い、そこで会話が始まり、時には友情にさえ発展しうる可能性さえも秘めたすぐれて人間的な行為であるとすれば、種々の困難・限界はありながら、否あればこそ、そういう行為が可能だったオリエンタリアを、なつかしく思うばかりである。

## 注

### (1)

- ① 中田吉信「オーストラリア国立大学の東洋コレクションと東洋研究」(「国立国会図書館月報」31 1963.10)
- ② 金中利和「オーストラリアにおける東洋研究とオリエンタル・コレクション」(「同上」)

68 1966.11)

- ③ 田中 梓「海外の図書館に勤務して感じたこと」(「同上」73 1967.4)
- ④ 川添登美夫「オーストラリアの大学図書館に勤務して」(「同上」92 1968.11)
- ⑤ 上野 博「オーストラリア国立図書館のことなど」(「同上」104 1969.11)
- ⑥ 金中利和「オーストラリアにおける全国書誌サービス」(「現代の図書館」v.8 No.4 1970.12)
- ⑦ 高橋 弘「最近のオーストラリアで見たこと、感じたこと」(「国立国会図書館月報」131 1972.2)
- ⑧ 高橋 弘「オーストラリアの公共図書館」(「現代の図書館」v.8 No.3 1972.9)
- ⑨ 高橋 弘「オーストラリアにおける日本研究事情」(「びぶろす」v.23 No.5 1972.5)
- ⑩ 川添登美夫「豊かな国に見る大図書館」(「国立国会図書館月報」174 1975.9)
- ⑪ 松野和子「オーストラリア国立図書館の科学技術館」(「ドクメンテーション研究」v.26 No.5 1976.5)
- ⑫ 松野和子「オーストラリア国立図書館の勤務態様」(「国立国会図書館月報」188 1976.11)
- ⑬ 川添登美夫「オーストラリアの図書館に勤務して」(「中部図書館学会誌」v.18 No. 2,3 (合併号) 1977.4)

(2) Shozo Nakano "The Japanese book market and the acquisitions of Japanese materials in the National Library of Australia" A Paper read in the 1st East Asian Library Seminar held 16, Sept. 1977 at Australian National University Library.

(3) The Association for Asian Studies Committee on East Asian Libraries, *Newsletter*, v.5 July 1976.

これによれば、多い順に、米国議会図書館：550,909、カリフォルニア大学(パークレー)：

170,005、ハーバード大学：139,918、ミシガン大学(アン・アーバー)：138,259、コロンビア大学：137,117、ユーール大学：93,024、メリーランド大学：83,638、ハワイ大学：72,017、シカゴ大学：68,484、カリフォルニア大学(ロスアンジェルス)：66,180 となっている。

統計年度が異なるので一概にはいえないが、おそらくオリエントリアの日本語コレクションは、全米第10位以内には入るであろう。

(4) ちなみに昭和51年度に当館がオリエントリアに送付した官庁刊行物は、図書2,930冊、逐次刊行物458タイトルであった。オリエントリアと当館とでは、逐次刊行物と定義が異なるので——年刊でも逐次刊行物とする——図書2,930冊のうち、実際にオリエントリアでは逐次刊行物として扱われるものもかなりある。

(5) 注(1)の②ならびに⑧。

(6) Stephen S. Large: *Japanese Studies in Australia. The Japan Foundation Newsletter* v.5 No.1 April, 1977.

(7) 注(1)の①ならびに②。

(8) 『国際文化交流の現状と展望』(外務省文化事業部 1972)

(9) 在東京オーストラリア大使館文化担当官、L.E. PHILLIPS 氏の御教示による。

(10) 注(1)の⑦。

(11) 注(6)に同じ。

(12) "CAS Today: Facts and figures about Chemical Abstracts Service" 1974 American Chemical Society.

(13) "CAS REPORT" No.5 10, 1976.

注(12) (13) とともに、竹内寿氏に御教示を賜わった。記して謝意を表する次第である。

(14) 寺田瑛子・大口里子・三上蒼生子「日本の科学技術雑誌の書誌の分析(1)(2)」(「科学技術文献サービス」No.45,46 1976., 1977.)

(なかの・しょうぞう 収書部選書課 選書係長)